日本歯科医史学会々誌・第24巻
第4号通巻93号・平成14年9月

江戸幕府の口科医の動向について[*1] 1

松　本　康　博[*2]

要旨：日本の歯科医学の発展を考えるうえで，江戸時代の歯科医学の状態を知ることは重要である．江戸時代の歯科医の象徴として，江戸幕府の医官の口科医があげられる．この口科医について検討された詳細な報告がある．しかし，これは寛政期末（1800）までの記録であり，これ以降江戸時代の終末期（1800年以降）については，史料，文献の乏しさから，明らかにされていなかった．今回，近年になり，新しく刊行された史料をもとに，江戸時代の終末期の口科医について，検討を行った．

江戸時代を通して，口科医は十二家存在した．そのなかで，金元家と福山家を除く十家が幕末まで継続し，本道（内科）に変わった多紀家と松本家を除き，八家が口科医として継続した．

江戸幕府が崩壊してからのこれらの人々の行動の記録は僅かであり，現在調査中であるが，その消息はほとんど不明である．

Key words：江戸幕府，口科医

日本の歯科医学の発展を考えるうえで，江戸時代の歯科医学の状態を知ることは重要である．江戸時代の歯科医の象徴として，江戸幕府の医官の口科医があげられる．この口科医について検討された詳細な報告がある[1,2]．しかし，これは寛政期末（1800）までの記録であり，これ以降江戸時代の終末期（1800年以降）については，史料，文献の乏しさから，明らかにされていない．今回，近年になり，新しく刊行された史料をもとに，江戸時代の終末期の口科医について，検討を行った．

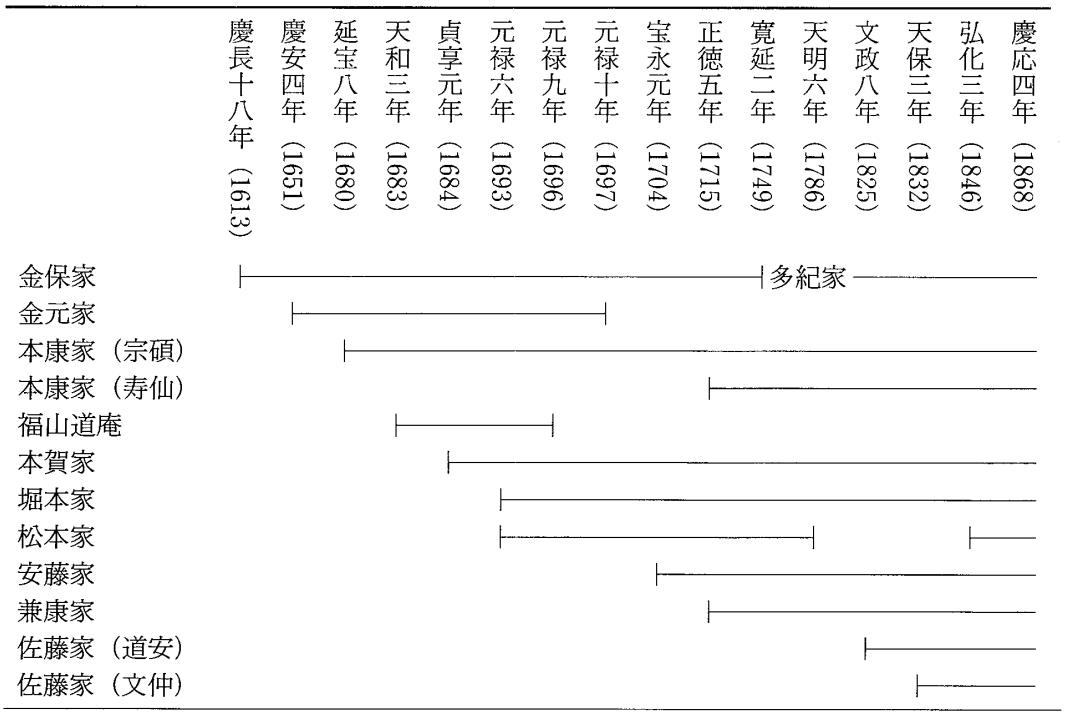
江戸幕府の幕臣の人名，経歴，履歴などを調べるうえで最も基本的な史料は寛政重修諸家譜[3]と武鑑があげられる．上述の報告[1,2]も主にこの史料によっている．その他に徳川実記があげられる[4]．江戸幕府により編纂された寛政重修諸家譜（完成したのは文化九年（1812））は寛政期末（1800）までの大名，旗本の家譜，系図を知ることができる[3]．しかし，それ以降については，このようにまとまった史料はない．

最近になり，新しくいくつかの史料が刊行されている．武鑑は江戸時代前期（1644）から慶応三年（1867）にかけて，民間書肆により出版された大名および幕府役人に関する名鑑で，ほゞ毎年出版されていたとのことで，全時代を網羅した影印本が刊行されている[5]．江戸城多聞櫓文書は[6~8]江戸城の多聞櫓などに所蔵されていた江戸幕府の記録や書き付けである．このなかに大名，旗本の人事関係の文書が含まれている．この文書のなかに明細短冊といわれるものがある．これは大名，旗本などの銘々から提出された書類で，氏名，年令，本国，生国，祖父の代までの役職名，本人の経歴などが記載されている．時代的には，元治(1864)から慶応にかけてのものが多い．これが完全に残っていれば寛永諸家系図伝，寛政重修諸家譜などに相当するという．この史料をもとに江戸幕臣

*1 Movement of the Koukai (stomatologist) of the Edo Shogunature 1

*2 Yasuhiro MATSUMOTO, Department of Oral Pathology, Tsurumi University, School of Dental Medicine　鶴見大学歯学部口腔病理学教室

表 1　江戸幕府口科医の推移



人名事典[8]が出ている．

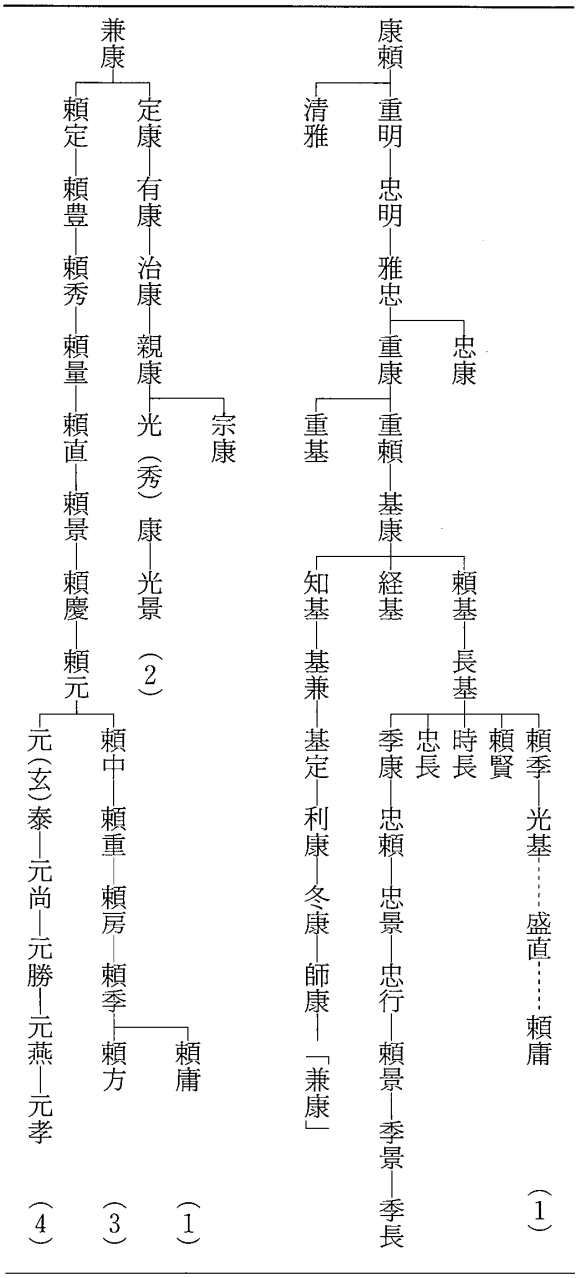
諸向地面取調書[9]は江戸市中にある大名や幕臣の家屋敷調査書であり，安政三年（1856）現在をあらわしているものであるという．これらの史料をもとに，寛政譜以降旗本家百科事典[10]，江戸幕府旗本人名事典[11]が出版されている．服部は徳川実記のなかの，医官についての記述を抜き出してまとめている[12]．この十数年に新しく刊行された史料をもとに，従来から不明であった，幕末期の口科医の動向を検討した．

表 1 は上にあげた史料をもとにして，江戸時代を通しての口科医の推移をみたものである．江戸時代は個人というより，家をもとにしたものであり，全部で十二家であった．そのなかで，金元家と福山家は一時期のみ存在したが，残りの十家は幕末まで継続した．金元家が慶安四年（1651）に薬を奉り黄金を賜ったこと，元禄十年(1697)，12 月 22 日に金元休庵と子供二人が宅地を質とし金を借りたことにより追放されたことが記載されている[3,4,12]．福山家は福山道庵一代かぎりのようであり，寛政重修諸家譜にも取り上げられず，天和三年（1683）から元禄九年（1696）の武鑑[5]にのみ名前が載っている．

一番古い金保家の金保は先祖の丹波兼康に由来する．丹波兼康が本道（内科）と口科を兼ねるようになったのが口科医のはじまりである．先祖の名をとり家号を兼康と称したが徳川家康の諱を避けて元（玄）泰の時に，金保と改めた[1~3,13]．徳川実記に慶長十八年（1613）に医員金保安斎玄泰に廩米百俵を給うとでている[4,12]．もう一つの兼康家は丹波兼康の男能紀が父の名をとり家号とした[3]とあるが，それ以上金保家との関係は明らかではない．弘順の代になり，正徳五年（1715）奥医となる[3]．

この丹波家は丹波康頼に始まるが，この系図はいくつかの文献[1,2,13~16]に取り上げられているが，不一致の部分が多い．文献のもとになっていると思われる系図が続群書類従[17]に三種類掲載されている．**表 2** は丹波家系図の一覧であるが，川上[2]の一覧表をもとに，修正を加えた．康頼から兼康にいたる部分と兼康からの部分を左右に分けてある．最も重要な部分で，系図により異なる所は，表 2 の (3)，(4) の部分で，頼豊から頼元までが，続群書類従[17]のなかの第二番目の小森本では，季康から季長にいたる系列の季長の次に連なり，兼康を経ないことである．第三番目の系図では，兼康の次に，定康と頼定となり，定康の系列には親康が，頼定の次には頼豊以下が連なっている（表 2 左側）．この小森本は頼豊以下の人々の履歴が年号も入り詳述されており，信憑性は高い．系図の

表 2　丹波家系図



最後に延寛八年（1680）小森家蔵を写すと記されている．しかし，頼豊以下が兼康に連なることは寛政重修諸家譜の多紀家の項[3]にも記載されており，また口科医の系列ということから考えても動かし難い事実と思われる．

もう一つ大きく異なる点は康頼より，兼康にいたる部分であるが，寛政重修諸家譜の多紀家の項[3]では，表2と異なり，康頼の男俊雅からはじまるとしている．この書のなかでも，冬康以前は系図により異なることがのべられている．表2の系図のなかには，俊雅の存在は認められないが，森[13]は康頼の子供は三子あり，重明，清雅，俊雅の順であるとしている．

兼康の存在していた年代は系図からは明らかではなく，現在でも，不確定である．松本[1]は兼康の祖父の冬康が花園天皇の齲歯を治療したという記述から応永（1394）から応仁（1467）の時代の人としている．他の史料からこれを推定すると，続群書類従の小森本系図[17]のなかで，年号の明らかな人々がいる．兼康，定康，有康，治康と連なるが，治康が年令は不明であるが，寛正四年(1463)に死亡したことが記載されている．また兼康，(頼定)，頼豊，頼秀，頼量となるが，その頼量が享禄二年（1529）に59歳で死亡したことがしるされており，1470年生まれであることが知られる．これらから，兼康は1330年から1380年頃に生まれたと推定される．

丹波家は（4）の金保（多紀）家の他に四つの系統があげられる．（2）の定康の系統で親康を祖とする親康家は口科をもって，代々宮廷に勤め現在まで継続している[14,15]．親康，光康の系譜ではもう一家，丹家があげられ，現在までつづいている[14,15]．(3)の頼定からの系譜では，頼秀の時代に号を錦小路としたことが小森本の系図[17]にみられる．また，頼季の時に号を小森にしたことが記されている．この（3）の頼方以下の小森家はその後も代々宮廷に勤め，典薬頭あるいは典薬助に任じられていた[14,15]．(1)の頼庸は頼季から盛直にいたる系譜を継いだ．盛直は天文十七年（1548）に死亡し，家が絶えた．その後，頼庸が宝永四年(1707)に号を錦小路とし，盛直の後を継いだ．代々典薬頭を受け継ぎ，明治十七年華族に列せられた[13~16]．

（4）の金保（多紀）家は元孝の時の寛延二年(1749)に家号を多紀にあらためた．その後は口科ではなく本道（内科）になった[3]．もう一家，松本家が本道（内科）にかわっている．松本家は元禄六年(1693)奥医になっている[3,4,12]．このときより御口科医であったが，天明六年(1786)，五代目善甫のときにけんかがもとになり，改易された[3]．孫の良甫のときの弘化三年（1846）に再び召し出されている[4,12]．この良甫の娘婿が，幕末から明治にかけ活躍した蘭方医の松本良順である．この事はこれまでの報告[1,2]ではのべられていない．司馬遼太郎の小説「胡蝶の夢」[18]は松本良順を描いている．このなかで口科医の生活の一端にも触れてい

る．

その他の家では，本康家は延宝八年（1680）に奥医となる[3]．もう一家の本康家の祖は本康宗碩の養子で正徳五年（1715）に奥医となる[3]．本賀家は貞享元年（1684）に寄合医になっている[3]．徳川実紀[4,12]には牙医本賀徳順貞保新たに召し出されるとでていて，牙医という語を用いている．その他に牙医という語は享保十年（1725）牙医松本善甫西城の奥医になるとある[4,12]．この歯科（医）の名称であるが，徳川実紀の他の部分では，口科あるいは口科医という名を使用している．武鑑[5]では初期には御歯医師を，後になっては御口科という語を用いている．堀本家は元禄六年（1693）に奥医になっている[3,4,12]．安藤家は宝永元年（1704）に奥医となる[3]．

幕末期に口科医になった二つの佐藤家の間に関連性はないようである．佐藤（道安）家は文政八年（1825）に奥医となる[4,12]．佐藤（文仲）家は天保三年（1832）より御目見医師として武鑑[5]に記載されている．徳川実紀[4,12]には文政三年（1820）に謁見を給わり，天保二年（1831）に初見と出ている．これらの記載からでは，佐藤（文仲）家が口科医であったことは明らかではない．明細短冊[7,8]から佐藤文仲が口科医であり，祖父，父，本人が佐藤文仲を名乗り，御目見医師であったことが知れる．著者は国立公文書館で文書目録[7]に載っている佐藤道安，佐藤文仲，本賀徳順，兼康栄順の明細短冊を確認した．

以上のべた各家が慶応から明治にいたるまで継続していたか否かは各年度の武鑑を見ればある程度は明らかである．慶応四年（1868）の慶応武鑑[5]に記載されているのは，佐藤道碩法眼，本康宗達法眼，寄合御医師堀本一甫，御目見医師佐藤文仲の４名である．安藤家は武鑑[5]に安藤安仙の名で嘉永元年（1848）から嘉永六年（1853）まで，寄合医師安益の名で安政元年（1854）から安政五年（1858）まで記載されているが，その後は記載がない．諸向地面取調書[9]（安政三年（1856）現在で編集されているという）には，寄合医師安藤安仙と奥御医師安藤安益の二人の屋敷が記載されている．二人の関係は明らかではない．武家の名前は名字，通称，諱（実名）からなり，公式の文書には名字，通称のみを用い，諱を書かない[11]で，しかも通称を何代も使用していることから，その人が何代目であるかわからないことが多い．安益は天保年代（1830～43）には法眼であったので，諸向地面取調書に出ている奥御医師安藤安益は先代の安藤安益法眼である可能性がある．安藤家は安政五年（1858）以降の記録はなく，不明な点が多いが，慶応，明治まで継続されたものと推定される．

江戸幕府の医師には，典薬頭，奥医師，番医師，寄合医師，小普請医師，目見医師などがある[12]．典薬頭は医師の上席に位し，半井，今大路両家の世職であった．奥医師は御近習医師ともいわれ，毎日登城して将軍および奥向の人々を診療する．番医師は表御番医師ともいい，殿中表方に病人がある時に診療した．寄合医師は家業に熟達したものを選んで，これに当て，平日は登城せず，不時の時に備える．御番医師とほとんど同様であるが，御番医師よりも任務は軽く，不時の時に備えることを主眼としている．小普請医師は武士，町人を治療して，その技を練習する者で小普請組の支配に属していた．目見医師は町医の中で特に成績優秀なものに御目見を賜り目見医師となった[12]．

その他の家については，兼康栄順，本賀徳順，本康宗仲（本康寿仙の系統）は小普請医であったことがわかる[6~11]．武鑑には小普請医は記載されていないので，先にあげた史料，事典[6~11]からでないと明らかにされない．兼康家は祖父栄庵，父栄元ともに小普請医であった．本賀家も養祖父貞順，養父貞順が小普請医であった．本康家も養祖父宗寿，養父栄寿ともに小普請であった．

このようにして，口科医十二家のなかで，金元家と福山家を除く十家が幕末まで継続し，本道（内科）に変わった多紀家と松本家を除き，八家が口科医として継続した．

江戸幕府が崩壊してからのこれらの人々の行動の記録は史料もほとんどなく，現在まで不明である．しかし，最近，出版された前田の著書[19]から，これらの人々の消息を示す数編の史料[20~25]が明らかになった．江戸幕府の崩壊に伴い，幕臣のほとんどは禄を失い，武士を捨てて農民や町民になった者も多かったが，徳川家とともに多数の幕臣が駿遠（静岡）に移住した[19]．それらの人々のなかに，佐藤道安，本康宗琢，本賀徳順[21]，本康宗仲，堀本好益[20]の名前が存在する．その他の史料[22~25]には静岡藩の奥医師として本康良琢の名前[22,23]，静岡病院の三等医師並として佐藤道碩の名前[24,25]

がのっている．佐藤道安と道碩は同一人であり，本康宗琢と良琢は本康宗達と同一人であると考えられる．明治四年に廃藩置県になり，静岡藩は静岡県になった．静岡病院は解散し，それに伴い，病院の旧幕府医師たちはほとんど東京にもどったという[26]．その後の二人の動向，さらに本賀徳順，本康宗仲，堀本好益といった人々の消息を調べているが，現在までのところ不明である．

文　献

1) 松本重彦：歯科を以て幕府の医官となりし人々．歯科学報 21 (8)：64-68，21 (9)：62-66，21 (10)：49-50，21(12)：66-69，1916，22(1)：67-72，22(2)：50-54，22 (3)：51-56，1917.
2) 川上為次郎：歯科医学史，金原商店，東京，1931，655-689 頁.
3) 続群書類従完成会：新訂寛政重修諸家譜，続群書類従完成会，東京，1964-1967.
4) 国史大系刊行会：徳川実紀，新訂増補国史大系，吉川弘文館，東京，1937.
5) 深井雅美，藤實久美子，編者：江戸幕府役職武鑑編年集成，東洋書林，東京，1996.
6) 大賀妙子：江戸城多門櫓旧蔵文書について　その整理状況と若干の史料の考察，北の丸 10 号，29-35，1978.
7) 内閣文庫江戸城多門櫓文書目録　明細短冊の部：国立公文書館，1980.
8) 小西四郎，監修，編集，熊井保，大賀妙子：江戸幕臣人名事典，新人物往来社，東京，1989.
9) 史籍研究会：内閣文庫所蔵史籍叢刊，諸向地面取調書，汲古書院，東京，1982.
10) 小川恭一：寛政譜以降旗本家百科事典，東洋書林，東京，1997.
11) 石井良助，監修，小川恭一，編者：江戸幕府旗本人名事典，原書房，東京，1989.
12) 服部敏良：江戸時代医学史の研究，吉川弘文館，東京，1978.
13) 森潤三郎：多紀氏の事蹟，思文閣出版，京都，1933(1985 再版)，19-23 頁.
14) 山田重正：典医の歴史，思文閣出版，京都，1980，276-289 頁.
15) 京都府医師会医学史編纂室，編集：京都の医学史，思文閣出版，京都，1980，1251-1267 頁.
16) 山崎　佐：錦小路家文書，日本医史学雑誌，6 (2)：21-41　6 (4)：36-38　1956，9 (2)：52-58，1959
17) 塙　保己一，太田藤四郎，編纂：続群書類従，第七輯下系譜部，続群書類従完成会，東京，1928 (1958 訂正三版)，342-380 頁.
18) 司馬遼太郎：胡蝶の夢，新潮文庫，東京，1983.
19) 前田匡一郎：駿遠へ移住した徳川家臣団，出版者，前田匡一郎，第一編，1991，第二編，1993，第三編，1997，第四編，2000.
20) 池沢政太郎書写：駿府え移住相願候家族人数書，原本内閣文庫，静岡県立中央図書館蔵，1978.
21) 池沢政太郎書写：駿藩各所分配姓名録，静岡県立中央図書館蔵，1979.
22) 駿藩役名便覧，明治二巳年正月新刻毎月改，1869，静岡県立中央図書館蔵.
23) 明治二巳年正月新刻駿府藩官員録，1869，静岡県立中央図書館蔵.
24) 静岡官員，1869．静岡県立中央図書館蔵.
25) 静岡御役人附，静岡県立中央図書館蔵.
26) 土屋重朗：静岡県の医史と医家伝，戸田書店，静岡，1973，268 頁.

著者への連絡先：松本康博
〒 210-0063 横浜市鶴見区鶴見 2-1-3
鶴見大学歯学部口腔病理学教室